

沿岸漁村地域における歴史的文化財としての舟屋の形成について

－新潟県糸魚川市筒石における舟屋の形成－

日大生産工（学部） ○宮原樹八 日大生産工（学部） 遠藤澤児
 日大生産工（非常勤） 砂田哲正 日大生産工 大内 宏友

1. 研究背景・目的

日本は島国であり太平洋、日本海に囲まれた水産資源が多く取れる国である。沿岸地域では生産（漁業）生活（気候、風土）により様々な知恵を用いてそれらが一体となり集落ができその集落特有の構築物が住居と別に建てられている。日本海沿岸に見られるその集落と舟屋を研究対象とする。舟屋は現在太平洋側には殆ど見られなくなったが日本海側にはまだ多く見られる。太平洋側に殆どない理由として気候などの条件を挙げられるが、太平洋側が開発が早く進み、海岸の埋立てや道路、護岸工事により舟屋が用をなさなくなり消滅していったと言える。日本海側でも漁村の原風景として舟屋の保存を推進しようとしても、地域住民への舟屋への意識や地上の材料の入手困難などの理由から近い将来、限られた地域以外消失すると指摘されている。また舟屋の所有者の高齢化や後継者がいないことも問題となっている。舟屋とはその地域の生業や暮らし、自然環境と向き合ってきた証である。豊かであると共に過酷でもある風土が舟屋という形、生産と生活が一体になって文化を築いてきた。その地域の特性がよく現れる建物であり、この舟屋を地域の財産として共有していくことが重要であると考え。本研究では漁村としての原風景残る舟屋と海と住居の相互の関係、生産（漁業）生活（気候、風土）や地域文化と建物がどのような関係かを明らかにすることにより、歴史として育んできた生産生活一体を捉えた空間構成明確にし、歴史的な建物として顕在化させることにより日本海側の漁村の原風景としてその景観を地域の財産として保護し、それを活用していく方法を考察する。

2. 研究対象

現在でも舟屋が使われており現存している日本海の外海に面しすぐ背後に山塊が迫る新潟県糸魚川市筒石を調査地域とする（Fig 1）。筒石は高温多湿であり春から夏にかけてはフェーン現象により南向きの風が吹き、秋から冬には偏西風、季節風が吹き日本海側は大荒れになる。また積雪が多い地域でもある。その生活（気候、風土）の中、筒石の舟屋（写真 1.2）は生産（漁業）を守るように様々な地域文化とともに過ごし現在の形となった。細い路地を隔てて 2.3 階建ての住居が密集しており、Fig 2 から住居の平面図は狭い土地を有効活用ため、細長くなりそれが密集し高密度な集落となっている（写真 3）。



Figure 1 新潟県糸魚川市筒石

<http://www.freemap.jp/itemFreeDlPage.php?b=niigata&s=niigata>



Figure 2 住居の平面図

引用文献 新潟県西頸城郡能生町大字筒石民族調査報告書



写真1 旧舟屋



写真2 新舟屋

Formation of boathouse as a Historical Cultural Property in Coastal Fishing Villages.

- Formation of boathouse in Tsutsuishi, Itoigawa City, Niigata Prefecture. -

Tatasuya MIYAHARA, Reiji ENDO and Tetsumasa SUNADA and Tomohiro OHUCHI



写真3 筒石の集落

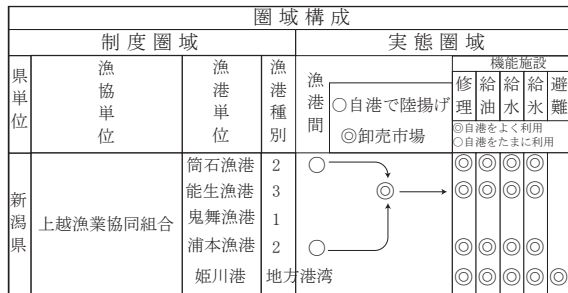


Figure 3 上越漁業協同組合の圏域図

またこの地域では漁村の高齢化が進んでいる。かつては活発な漁村であり現在と比べ漁師の人数も 1/3 ほどに減ってしまった。その当時は当地方三大漁業場の一つであった。現在筒石漁港は上越漁業協同組合に属している (Fig 3)。風土から現在の環境まで舟屋を保存していくのに過酷な筒石の地域を調査対象とする。

3. 分析方法

文献により集落の本家、分家を地図にプロットした。また現地調査や聞き取り調査も行い集落の特性をつかむことから始めた。集落の特性を掴み、その特性から舟屋への関係性などを考察した。集落の本家から分家がどこに分かれているか、またその派生の方角や気候、風土との関係を地図上に表し、明らかにして集落の特性を読み取った。その後、漁法と舟屋の関係、また舟屋の位置、規模、形態を集落の特性とを比較し当てはめそれぞれ考察する。

4. Fig 4 からよみとる集落の特性

Fig 4 は「新潟県西頸城郡能生町大字筒石民族調査報告書」を元に本家と分家、また派生する方角をプロットしたものである。Fig 4 からその集落の特性を読み取りそれぞれ考察をする。

4.1 本家の位置の特性 (Fig 5)

Fig 4 から本家は道の交差する所に多いことがわかる。筒石では天候を確認するのに「秋は山を見れ、春は海を見れ」という言葉がある。漁村であるこの集落では天候が悪い時、漁は危険となるので天候の判断はとても重要になる。このことから道の交差に本家をおくことで家から一歩出て海と山の両方を見

れるようにし天候の判断をすぐにできるようにするためだと考えられる。これらの理由から本家を道の交差するところに作ったと言える。また道の交差に置くことで船主である本家から集落を見る事ができ船主から船員である分家や周辺に情報を発信しやすいためにあると考えられる。筒石の漁村ならでわの集落の成り立ちであると考えられる。

4.2 本家から分家への位置関係

Fig 4 の表から見て取れるように本家から分家への方角が東が 50 戸と最も多くなっている。また南北への分家は極端に少ない。南北へ少ない理由として、筒石特有の集落の背後 (南) まで山塊が迫っているため、家を建てれる土地がなかったことからだと考えられる。だから南北の分家より東西の分家が多いと考えられる。また西側より東側に多い理由として、この筒石の地域では北には海があり南側には山がある風土から、春から夏にかけてはフェーン現象により南風が吹き、秋から冬にかけては偏西風や季節風が吹き荒れ東向きの風が吹くようになっている。また冬には積雪が起こるほど寒い地域となっている。このことから冬に暖をとるなどの理由から火を多く使う。冬に吹く偏西風と季節風はどちらも西から東向きへの風になる。そしてこの筒石の集落は地形上有効に使える土地が少ない為、木造住宅の密集地域となっている。このことから火災が起きたとき東側へと燃え移ることを考え本家を守る為より風下側の東側へと分家を置いたと考えられる。

4.3 舟屋と集落の関係 (Fig 6)

筒石には2つ舟屋がある。新しい舟屋は現在漁を行う際に利用している。古い舟屋は現在漁協が管理しており貸し出して家賃を払うようになっている。また利用目的として、筒石の人が趣味で釣りなどをする船などを収納している。その新しい舟屋と集落との位置の関係は集落から近くまた集落の中心地にある。変わって古い舟屋は集落より東側に位置しており集落から少し離れた所に位置している。集落の前にも作ることが可能であったが古い舟屋は東側のはずれに作られた。これは実際に漁業が行われる漁業場が古い舟屋の近くであり、集落の東側であったと考えられる。昔は船にエンジンなどはついておらず手漕ぎの船などを使用しており船を出してすぐに漁業場まで行けるよう舟屋を東側に作ったと考えられる。また新しい舟屋は現在の船にエンジンがついて船でもすぐに漁業場まで移動可能になった為集落の利用の弁が良い中心地にできたと考えられる。

5. 漁法と舟屋

5.1 八そう張り網漁 (Fig 7)

八そう張り網漁はかつてはメインの漁であった。現在は底引網漁メインとなった。八そう張り網漁は複数の船で行われる漁であり、漁師の共同経営により一年中行われた漁であった。写真 4 の舟屋は複数の船を収納することができる舟屋となっている。共

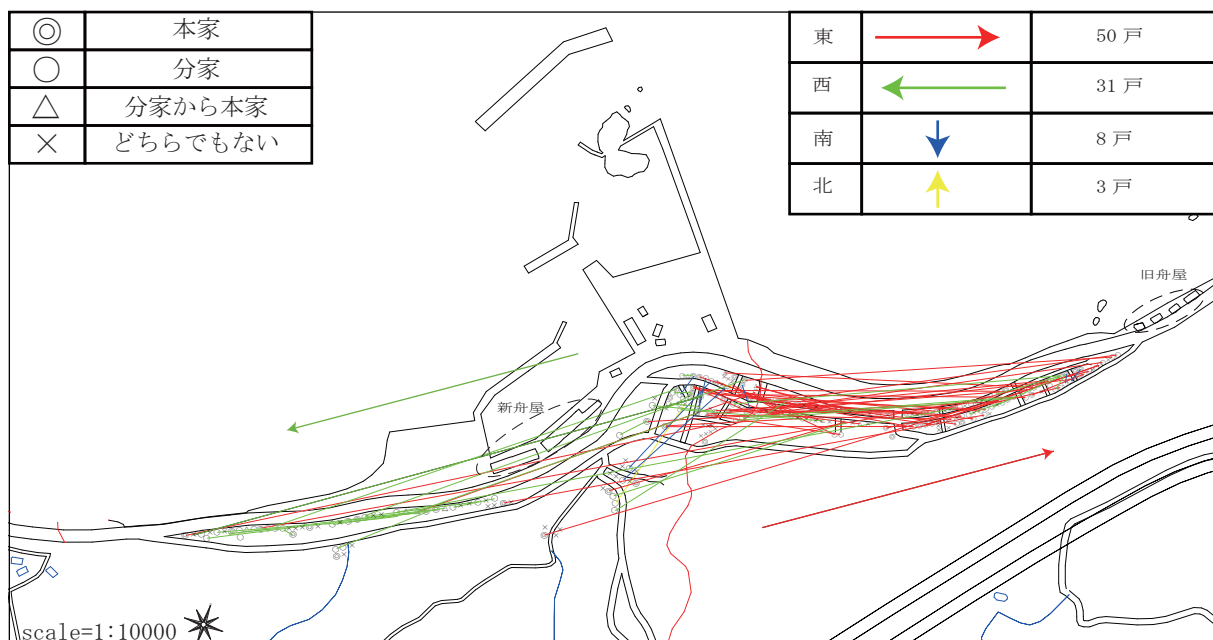


Figure 4 筒石の集落の派生の仕方

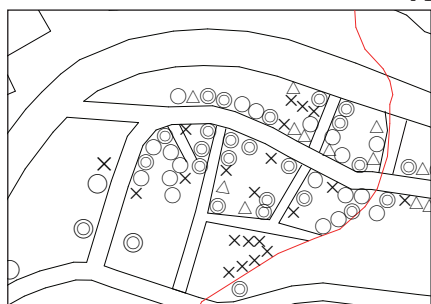


Figure 5 本家の位置の関係

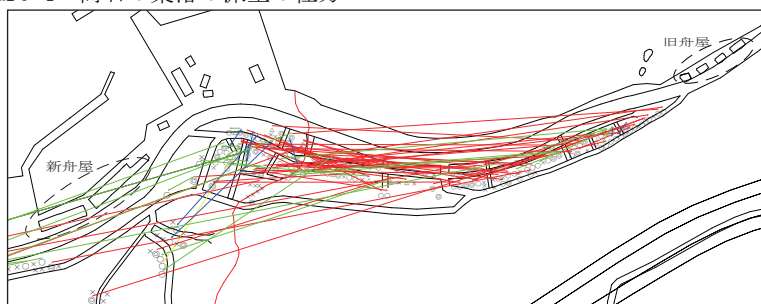


Figure 6 舟屋と集落の関係

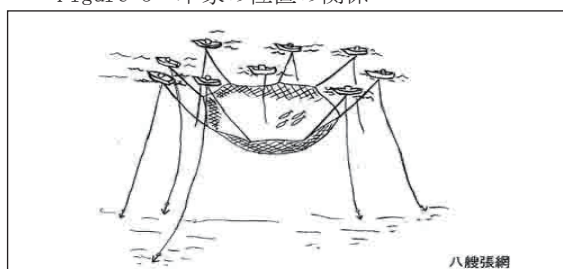


Figure 7 八そう張り網漁

<http://www.pref.toyama.jp/branches/1661/suisan/no04.html>

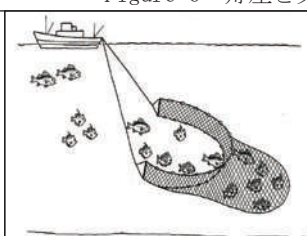


Figure 8 ごち網

<https://www.hiroshima-kankou.com/spot/3951>

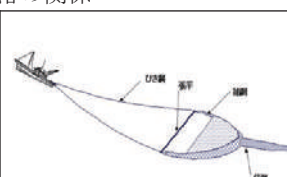


Figure 9 小型漁船底引網漁

https://www.kaiho.mlit.go.jp/06kanku/takamatsu/d_safety_navigation/d_04anzen/d_4_0lanzen/d_4_1_11/d_4_1_11.html



写真 4 広い舟屋



写真 5 広い舟屋 道路側



写真 6 二階建て舟屋



写真 7 一階建舟屋

同経営のため漁に出るときに共に出やすくするため複数の漁師で建てたものだと考えられる。また大きなハッタ網を手入れするためにも他の舟屋より広く建てられたと考えられる。写真 5 のように道路側から見ても一つの舟屋であるが入口は複数見られる。このことから複数の漁師の経営から成り立っている事が読み取れる。この舟屋は2階建てとなっている理由として、灯を使う漁であるため厳冬期も夜な

夜な行われた漁であった。厳冬期や徹夜でやる漁なので舟屋から集落まで少し離れていることから漁が終わり休むスペースが必要なりこのような二階建ての形になったと考えられる。

5.2 ごち網漁 (Fig 8)

この漁は潮の流れに逆らって網を引く漁であり船一隻単独で行われる漁である。この漁は日の出から始まり日没まで行われる漁である。ごち網漁の特性

から写真 6 の様な舟屋が形成されたと考えられる。船一隻で行われる漁であるためその船の収納スペースと日の出から日没まで行われる漁であるため八そう張り網漁同様、集落と舟屋が離れているため二階建てにし漁が終わった後に休むスペースを設けるためこの形になったと考えられる。

5.3 小型漁船底引網漁 (Fig 9)

この漁は現在主体で行われている漁である。その他に刺網漁業、延縄漁業など筒石では行われている。これらの漁法から写真 7 の様な舟屋が形成されたと考える。船が収納できるスペースと、漁に出る時間もそこまで長くないので他とは違って二階建てではなく漁の荷物などを収納する屋根裏の様な空間が必要で写真 7 の一階建ての舟屋の形になったと考えられる。

6. 歴史的文化財としての舟屋

筒石の舟屋はこの集落の特色の風土や歴史と向き合ってきた建造物である。筒石は冬には積雪するほど雪が降る。集落の屋根は全てが瓦の切妻屋根であり雪や雨に強い形になっている。集落と同様に舟屋にも切妻屋根がほとんどである。また片流れの屋根も多数あり海の浜川にほとんど傾いており道路に雪が落ちない様に配慮されているのが見て取れる。また舟屋に収納されている船はどれも地上においてあるのではなく舟屋に吊るしてあった。これは冬など海が荒れやすい環境である中、船が波に持って行かれない様に考えられた知恵が現在のこの景観を作っていると言える。この様に過酷の環境から舟屋の中に船だけではなく修復材料の様な木材を収納している舟屋も見られた。これもまた他の地域とは違う筒石の舟屋の景観を形成している。

7. まとめ

本研究では新潟県糸魚川市筒石の集落、舟屋について考察を行なった。

本家の位置の関係 (Fig 5) から筒石ならではの集落の歴史的な住居の配置計画が見られ、これは筒石の住民の知恵を明在化させたものといえ、本家から分家への位置関係からは、地形上の理由や防災に対してのなど筒石の特有の気候や風土と対話の中で生まれた。これらは漁村ならではの形態であると言える。

舟屋と集落の関係 (Fig 6)、漁法と舟屋の関係ではその時代の技術に応じて形態や位置を変え舟屋とともに現代まで成長してきた。また過酷な環境である日本海から筒石の船を守る Fig 5 同様にその過酷である風土と向き合ってきた。これらのことからこの集落では住むというだけではなく漁業 (生産) とともにありながら集落の配置など生活をともに考えてきた。また舟屋も同様にその集落の風土、歴史、生活、漁業 (生産) を形にしたものだと言える。今回の対象は筒石であったが他の

舟屋でも同様にその地域ならではの場所性をもった形態になっていると考えられる。この様な舟屋を集落と舟屋との関係性にみと考えるのではなく集落の中の舟屋と認知しその地域全体で歴史的に現在もまだ作り続けていると意識を持って保護して行かなければならないと考える。また現在漁村では高齢化や漁師不足などが問題となっている。この舟屋を観光資源としての情報の発信源とすることで、舟屋を通してその集落の魅力に気がつき、また住んでる地元住人にも意識してもらうことで漁村の再生と舟屋の保全につながると考える。日本にはまだ舟屋が残っているところが散見される。今後その他の集落と舟屋をと共に研究し形態や歴史、特性を明らかにすると共に日本海側の漁村としての原風景を守る活動に少しでも貢献していきたい。

参考文献

- 1) 成城大学民俗学研究会：成城大学民俗調査報告書 第四集 新潟県頸城郡能生町大字筒石民族調査報告書
- 2) 神崎宣武・中村茂樹・畔柳昭雄・渡邊裕之：舟小屋 (INAX BOOKLET)・INAX 出版 2007
- 3) 小林久高、釜床美也子、安高尚毅：隠岐諸島における舟小屋の分布状況と立地・構法の特性、日本建築学会計画系論文集、第 743 号、21-31、2018. 1
- 4) 柴嶺高行・今村洋一：新潟県における舟小屋も残存状況及び外観特性、日本建築学会北陸支部研究報告集 54, pp. 409-412 2011. 7
- 5) 大内宏友、砂田哲正：地域住民における環境認知の構成要素と広がりに関する実証的研究 - 環境認知の領域を主体とした実態圏域その 1、日本建築学会計画系論文集、第 465 号、pp. 69-75、1994. 11
- 6) 大内宏友、坂本龍宣、砂田哲正、高橋康征：地域住民の環境認知における集落の類型に関する実証的研究 - 環境認知の領域を主体とした実態圏域その 2、日本建築学会計画系論文集、第 492 号、pp. 75-81、1997. 2
- 7) 根来宏典、大内宏友：環境認知による沿岸漁村地域における複合圏域の形成 プロセス - 地域住民における環境認知にもとづく計画圏域の設定 その 1 - 日本建築学会計画系論文集、第 573 号、PP. 63~70、2003. 11
- 8) 大内宏友、宮崎隆昌、宗正敏：漁協を中心にとらえた漁港と集落の圏域の構成に関する実証的研究 - 沿岸漁村地域における圏域の構成 - その 1 日本建築学会計画系論文報告集 第 369 号
- 9) 大内宏友、宮崎隆昌、宗正敏：漁協を中心にとらえた圏域の特性とその変容に関する実証的研究 - 沿岸漁村地域における圏域の構成 - その 2 日本建築学会計画系論文報告集 第 382 号